

Natnmal Tatia (ed.):  
Abhidharmasamuccaya-bhasyam

吉元 信行

一

本書は Abhidharmasamuccaya-bhasya (以下 Asbh と略す) の梵文マニユスクリプトの N・タティア博士による校訂版である。序文にも述べられているとおり、このマニユスクリプトは、一九三四年、ラーフラ・サンクリトヤーヤナ師が、チベットのコル僧院において発見し、それを写真に撮って、他のテキストの写真とともにインドにもたらしたものである。この写真は現在も、ムトナの Bihar Research Society の図書館に保管されている。

周知の如く、Asbh は無著 (Asaṅga) の Abhidharmasamuccaya (以下 As と略す) の原文で現存する唯一の梵文註釈書である。As には漢訳(大正 No. 1605 大乘阿毘達磨集論、略して集論) およびチベット訳(影印北京版 No. 5550) が存する。Asbh は漢訳として安慧に帰せられた大乘阿毘達磨集論(略して雑集論、大正 No. 1606) に相当するが、漢訳ではその中に本論(集論)の文をも併せ収めている。そのチベット

訳は影印北京版 No. 5554 に相当する。集論および雑集論は、瑜伽行派の代表的論書として、中国や日本において古くから研究され、また、後の唯識・法相宗等の宗学においても特に依用され、今日の佛教に大きな思想的影響を与えているものである。

As のマニユスクリプトは、Asbh のそれと同時に発見されたものであるが、既に一九四七年に、V・V・ゴーカー博士によって校訂公表された (Gokhale V. V. "Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga", *Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society*, N. S., Vol. 23, 1947)。しかし、残念なことに、この As のマニユスクリプトは全体の三分の二に当る部分が散逸している。そこで、P・プラダン博士は、その不完全なマニユスクリプトを再整理して、Asbh のマニユスクリプトおよび As の漢訳を参照し、As 全体の再校訂と散逸部分の還元補筆を試みた (Pradhan, P. ed. *Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, Santiniketan: Visvabharati, 1950)。ここに、われわれは大乘阿毘達磨に関する重要な一原典の全貌を伺い得ることとなったわけであるが、しかし、評者もかつて指摘した如く、このプラダン博士による As の校訂や梵文の還元には種々問題点がある(拙稿「書評 Walpola Rahula: Le Compendium de la Super-doctrine d'Asaṅga」佛教学セミナー18号・京都・昭48・九二頁、ほか)。この中で、As の現存する唯一の梵文註釈である Asbh には As からの引用やその説明が豊富に含まれているわけであり、その上、Asbh のマニユスクリプトには一葉の欠落もなく、全文がほとんど完全な

形で残されているとのことであつたので、これは、As 散逸部分の還元や正しい読解にとつて不可欠のテキストとして、学界から久しくその公表を切望されていた。発見後四十年にもなろうとする今日、ようやくこの原典が陽の目を見ることになったことは誠に喜ばしいことであり、本書が学界に資することは大であらうと思つ。

学界では、この Asbh の公表が待ち切れず、既にハンブルグ大学教授シュミットハウゼン博士は、Asbh のマニユスクリプトのコピーを入手して、一九六九年に著わした Schmithausen, L. *Der Nirvāṇa-abschluss in der Vinīśayasangrahaṇī der Yogācārahīnī*. Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen sud- und Ostasiens. Heft 8, Wien, 1969, にそれを引用して以来、何回かその論稿に Asbh を資料として用いている。また我国でも、滞印中タティア博士の Asbh 校訂の仕事に協力した (P. xxi) 篠田正成氏が、一九七〇年に発表した論稿に Asbh を引用している(篠田正成「Abhidharmasamuccaya-bhāṣya の成立年代」印佛研 18—2)。評者も、かつて何回か篠田氏の筆写された Asbh 本文を借覽させて頂いたことがある(吉元・玉井「梵文阿毘達磨集論における煩悩の諸定義」佐々木現順編著『煩悩の研究』清水弘文堂・東京・昭五〇、ほか)。いま、タティア博士の校訂になる本書の刊行によつて、Asbh 及び As の研究、更に瑜伽行派・唯識学派の思想研究は大きく進展を見ることであらう。

校訂者 N・タティア博士は、本書のほかに、以前、本書と同

じシリーズの中で A・タクル氏とともに中辺分別論の梵本の校訂版を出している (*Madhyanta-Vibhāga-Bhāṣya*, ed. by N. Tatia and Anantatal Thakur, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967, Tibetan Sanskrit Works Series No. 10)。ジャーヤスワール研究所と言へば、ラーフラサンクリトヤーヤナ師がチベットから將來した佛教マニユスクリプトの多くを蔵することでも知られている。そして Tibetan Sanskrit Works Series としてサンスクリット原典を次々に出版してきているが、それは本書で第十七冊を出すこととなった。このシリーズに Pramaṇavārtikabhāṣya 等佛教論理学に関するテキスト類のほか、先に述べた中辺分別論梵本や Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti および阿毘達磨俱舍論梵本など、佛教研究に不可欠な論書が多数含まれていることはよく知られているが、今回の本書の刊行は先行のそれらのテキストに劣らない重要な意味を持っている。

## 二

かつてラーフラサンクリトヤーヤナ師によつて Bihar and Orissa Research Society 誌上に発表された目録によつて、このマニユスクリプトについては次のように記されているといふ。

No. 86

Title Abhidharmasamuccayabhāṣya

Author T. (Yasomitra)

## Script Māgadhī

Size 11 1/3-2 1/6. (in inches)

Leaves 149

Lines 6

この記述について、タティア博士は、Asbh のマニエスクリプトの書体は Magadhī 文字でなく、Proto-Maithilī 文字であると修正する。また、葉数は一四九葉に更に余分の一葉が追加されているという (p. xxj)。

Asbh の著者について、このマニエスクリプト自身は何も言及してないが、チベット伝では Rgyal bahi sras となっており、上掲のラーンラ師作成の目録ではこれを Yasomitra に据るとしている。この点については既にコーカー博士が疑義を呈してゐる (Gokhale, V. V. "Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga", 前掲, p. 13)。<sup>1)</sup> タティア博士はこれを修正して、北京版大谷目録の如く Jinaputra であるとす。また、中国伝によると、獅子覚 (Buddhasiṃha) に As の註釈の述作があり、それと無著の As を安慧が合糅して、大乘阿毘達磨雜論を作ったとされている。先にブラダン博士は、As と安慧の唯識三十頌釈 (Tīrṃśīkā Bhāṣyā) の相似性を指摘して、<sup>2)</sup> Asbh の著者は安慧であると推定してゐる (Pradhan, P. P. ed. *Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, introduction p. 19) が、タティア博士も、更に Asbh と唯識三十頌釈の相似性を指摘してゐる (p. xxiii)。

Asbh と唯識三十頌釈の相似性については、夙に高崎正芳氏

が両者のチベット訳を用いて指摘している (高崎正芳「無著・阿毘達磨雜論について」大谷学報 36-2、京都・昭 31・四一-四二頁)。本書の序論において、タティア博士が表示している Asbh と三十頌釈との本文の相似点の対比は、はからずも高崎氏の所論を裏づけることになったわけである。しかし、両論の一部の文章が相似しているということだけで、その著者が同じであると結論するのはあまりに早計ではなからうか。チベット伝の Jinaputra 説と中国伝の獅子覚説も文献にはっきり記されている以上、無視するわけにはいかないであろう。

こうして、Asbh の著者について、今日の学界では未だ決定的結論に達してないが、篠田氏はこの Asbh と唯識三十頌安慧釈・As・安慧の五蘊論釈・安慧の俱舍釈論などの互いに連関のある部分と比較して、<sup>3)</sup> どうやら Asbh の著者は安慧以前で無著や世親に近い時代に書かれたと推定して、獅子覚の著とする中国伝を採っている (篠田正成「Abhidharmasamuccaya bhāṣyā の成立年代」印佛研 18-2、四三七-四四一頁参照)。これに対して、年代的に Jinaputra とする説も可能であるとする高崎正芳教授の所論もある (高崎正芳「大乘阿毘達磨雜論の漢藏伝承について」印佛研 19-2、昭 46、二七頁)。

タティア博士は、また、Asbh の章分けについて言及している (p. xxv)。周知の如く、漢訳の集論・雜集論では、全体が本事分と決択分に大別され、それらが更に四品づつに分かれて計八品より成っている。これと Asbh の章分けを対比すると次の様になる。



序文の最後に校訂者はこの Ashh の思想的立場について論及する。そして、他の諸論書と対比した結果、次の諸点を指摘す (p. xxvii~xxix)。

(一) 唯識三十頌釈における心所の解釈のいくつかは、As や Ashh からの引用らしい。

(二) 阿頼耶識存在の証明のところは瑜伽論とまったく一致する。

(三) 蘊・処・界についてのいくつかの設問に対する答えは、俱舍論と同じ仕方であらわれている。

(四) Ashh には大乘阿毘達磨經から五つの偈の引用があるが、これはそのまま撰大乘論にも引用されている。

(五) パーリ相應部から一偈が引用されているが、これは俱舍論にも同じく引かれる。

(六) マニユスクリプトの増補部分には、俱舍論やアビダルマデイーパにも見られる箇所がある。

(七) 称友の俱舍論疏に見られる箇所もある。

(八) 波羅蜜の解釈では大乘莊嚴經論と類似する。

これらのことから、校訂者は、本論書は、唯識学派あるいは瑜伽行派のアビダルマを表明したものであり、唯識学派のテキストのみならず他の学派のアビダルマテキストとの一致や引用があると結論する。

Ashh は、思想的には瑜伽行派・唯識学派の代表的論書の一つであるのみならず、ここに指摘された様にアビダルマ諸論書と重要な関連の見られることが大きな特色である。この Ashh の本論である As は、当時部派佛教諸派においてアビダルマ論

書が作成されていたと同様に、大乘の教義をアビダルマ的説相をもって説いたものである。その註釈である Ashh も同様の目的で作られたはずである。そこに大乘とアビダルマの接点を見るところの意味で、本論書の出版によって、大乘アビダルマという新しい学問分野が大きく進展することになる。

### 三

本書の主要部分であるマニユスクリプトの校訂は、かなり厳密で、おおむね正確になされている。そして、As のプラダン本の頁、マニユスクリプトの葉數、漢訳(大正大藏經)・チベット訳(北京版)の頁が書きこまれており、それらの対照が容易にできるようになっている。

また、校訂本文には、章分けがなされており、それが更に内容によって節に分けられ、その節も細かく項に分けられている。これによって、As との対校がいよいよ容易にできるわけである。その章分け等の区分の内容は目次にもそのまま出ており、目次を見るだけで、本書の佛教要語辭典的性格が伺われる。そして脚註には、マニユスクリプトにおける欄外修正の指摘、本論・藏・漢訳との異同、他の諸論書との一致点の指摘等、かなり詳しい記述がある。

本文中、As の引用に相当するところはゴチック体で表記されている。ところで、前にも一言した如く、As の梵文には散逸部分があり、本書が依用したプラダン本には不都合と思われる還元が再三見られた。そこで、実際には As からの引用であ

っても、もしブラダンによる As の還元がまちがっておれば、本書においてそれが引用とはみなされなくなるといふ危険性がある。事実、本書の中で、この As 散逸部分に対する註釈については、そのどれだけの部分が As の引用であるかについて、いくぶん修正を要する点が見られる。このことは、TS と TBh とを厳密に対照することによって、比較的容易に判明するのであるが、校訂の過程でそういう作業は十分になされなかったであろうか。評者が試みに本書の七四頁のみについて調べてみたところ、修正すべきものとして、次の諸点を見出した。

(1) 1. 10. saṃskāraṇām\*uparamat sa\*nirodho'nyah/ この部分は、TS と TBh あるいは集論と雜集論とも一致するところであるから、引用部分と見て良いであろう。ただ、ブラダンの還元では \*——\* が uparamān となっている。

(2) 1. 12~13. prapañcaḥ punar asmimn arthe'yonisās cintyety \*amārgenānyāyenāyena cintyety\* 本書では prapañcaḥ のみが引用であるとされている。この部分のブラダンの還元は asmimns tv arthe prapañcōpattih na sam-cintyā na mārgena na nyāyena na kuśala-prayogeṇa cintyā iti. (As. p. 62) となる。しかし、これは漢訳「於此義中、若生戲論、非正思議、非道、非如、亦非善巧方便思故」(大正・三一・六八一 c) の直訳と思われる。TS と TBh からすれば、このブラダンの還元は不当であり、チベット訳の文はむしろ Ashh と一致する。そこで、評者はここに掲げた Ashh の全文を As からの引用と見た。ただ、\*

——\* の部分は TS にはなく、TBh の方のみあるので、あるいは註釈部分の混入とすべきかもしれない。

(3) 1. 15. prañā-vikāṇām ḥ prañā-vimuktānam のミックスプリントであろうが、この部分は全文引用である。

(4) 1. 17. aseṣa-prahānam も引用とすべきである。

(5) 1. 18. tat-pariśiṭāni の tāt tat は引用ではなく。TBh にはのみ tat の相当訳あり、TS にはないことによる。

右と同様な問題点は、この頁ばかりでなく他にも随所に見出されるので、As の梵文現存部分に相当するところも含めて、As の引用かどうかを改めて検討しなおす必要がある。このことは、As の梵文散逸部分の解説あるいは再還元にはどうしても必要になってくる作業であるからである。

また、本書には、校訂部分に詳しい脚註があるが、校訂本文を含めて、脚註の中にいくぶん修正や附加を要するところが見受けられる。気のついたところのいくつかをあげると次の如くである。

(1) p. 7, 1. 4. śeṣāḥ pañcadaśātmīya-dīśāyah これに相当する訳が TBh にはないので、その旨註記を要する。

(2) p. 8, 1. 15. vikṣepam ḥ TBh に欠けているので註記を要する。

(3) p. 11, footnote 1 ḥ T. and Ch. add pratyayah と記されているが、漢訳 (Ch.) では更に「相統必仮衆縁和合」なる句が附加されている。

(4) p. 11, 1. 13. citām は引用ではなく。As は citatām ḥ



は決して本書の刊行の意義を大きく低減するものではない。この重要な新資料の学界での初公表は何といっても大きな学術的価値をもっている。本書の出版が予想外に遅延したということは、本テキストの本論であるAsの不完全さに加えて、このマニスクリプトの判読の困難さや、また、このテキストの思想的教義的難解さ等の事情があったからであろう。本書の脚註は、完全とは言いがたいが、Asや蔵・漢訳の対照の上に、注目すべき点を註記しておりたいへん有益である。更に、本文中に記入されたAs・蔵・漢訳の頁数は本論書をひもとく者にとって特に便利である。例えば、我々が漢訳の雑集論を読む場合、この校訂本の本文中に漢訳の相当頁が記入されているから、漢訳に相当する梵文を容易に捜し出すことが出来るし、また同じ校訂本によってそこに相当するチベット訳を北京版に求めることが難なくできるわけである。ただ、註記の若干のところでは、序文で指摘された如きアビダルマや大乘の関係論書との連関についての言及もほしかった。

Asには(したがってAsphにも)重要な佛教語の定義的説明が数多く見られる。その点で、アビダルマ諸論書の中の俱舍論に近い資料的価値をもっているといえよう。既に俱舍論については、平川彰博士等によって梵・蔵・漢語の総索引が作られ学界を益しているが、本論書についても、Asとあわせた総合的索引のできることを期待したい。それができれば、瑜伽唯識を中心とした大乘佛教の思想的なあるいは文献学的な研究は更に躍進を見ることがであろう。

ともかく、この分野で研究せんとするいかなる学者も、校訂者が広く提供してくれたこの基本的資料から恩恵を受けない者はないであろう。少なくとも、本書はインド佛教を学ばんとする学徒には是非とも座右においてほしいテキストの一つであると考ええる。

(Tibetan Sanskrit Works Series No. 17, Patna: K. P. Jayaswal  
Research Institute, 1976. 15x24cm pp. xxix+156, Rs. 16)